新聞に載らない内緒話

タバコ、煙草、莨

木守柿、という言葉がある。

晩秋の、柿の木の風情である。夕日は暖色に長い脚をのばし、カラスはカアと鳴き、そして山は、眠る準備に入る。

木守柿—「こもりがき」とも「きもりがき」とも「こまもりがき」、もしくは「きまもりがき」など、地方によって読み方は異なるようだ。

たわわな青柿はいつの間にか熟柿（じゅくし）となり、収穫され、さらには人手の遠のいたそれは朱（あか）くしぼんで、ベチャリと路上に落ちる。

最後に数個、もしくはひとつの柿の実が枝に残る。人々はすべてを収穫せず、柿を、木になったまま残したのである。

風習は、豊かな実りを与えてくれた自然への感謝であり、来年への豊作の祈りであり、野鳥のために残しておくともいわれた。

思えば木守柿は人間と自然、獣たちとの、共存の象徴であった。

猿守（さるもり）、という言葉もあった。

文豪・幸田露伴の孫で、長女幸田文の一人娘だった青木玉が著書「なんでもない話」（講談社文庫）で触れている。

「赤ちゃんを護る神様は、日替わりで十二支を守役におつけになる。ほかのものは、それぞれの取柄で上手にお守りをするのだが、猿はいたずら好きで、髪の毛を引っ張ったり、眠いのを突（つつ）いたりして泣かせる。赤ちゃんにすれば厄日である。今日は猿守だから仕方ない。私などは小さい時、よくそんな風に言われて、ぐずっているとねんねこ半纏（はんてん）でおぶってもらった」

つまり、いつになく赤ん坊がむずがる日を、昔の人は「猿守の日」として諦めたのである。

昔話「猿蟹合戦」に、柿（の種）と猿が登場する。

「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」

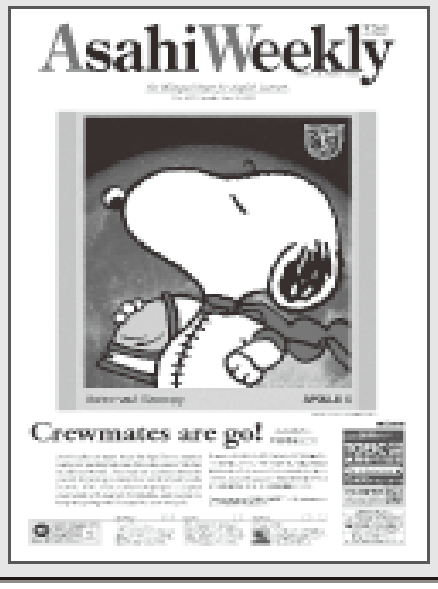
今更言うまでもない。正岡子規の、句である。1895年（明 28）5月、日清戦争に従軍記者として参加した子規は従軍中に喀血（かっけつ）、神戸での療養生活後に故郷松山に戻った。松山中学の教員であった夏目漱石の下宿（愚陀仏庵）に滞在、小康を得て再び上京する。その途上、奈良に数日滞在した。

柿にはビタミン、カロテンが豊富に含まれ風邪に対する抵抗力をつけ、アルコールの分解を助けるビタミンCは、緑茶の3～4倍、みかんの2倍だとか。「熟柿（じゅくし）のような色」といえばだいたい色、夕日とその光芒（こうぼう）に例えられる。「熟柿のような臭い」は酒に酔った人の、息を形容する。緊急事態明け、二日酔いにはご注意を。

「新聞に載らない内緒話」　http://www.nikkansports.com/general/column/naisyo/news/

※上記のＨＰ（ホームページ）からの原稿の転載はご遠慮ください。

Asahi Weeklyは、
朝日新聞社が発行する
英語学習者向け
バイリンガルペーパーです
毎週日曜日発行
月額￥1,016（税込み）
お申し込みはお近くのASA（朝日新聞販売所）へ



朝日ウイークリーは
「ピーナッツ」のコミック日曜版を
日本語訳付きで
毎週、掲載しています

朝日新聞
新聞購読料のお支払いは
口座振替
クレジット払いが
便利でお得！
わずらわしさスッキリ解消！
クレジットカードのポイントがたまる！

専用の申込書にご記入の上、ご投かんください。ASA 欲しい新聞・雑誌などでご利用いただけます。
お問い合わせ・お申し込みは最寄りの販売へ